
STARDRIVER コラボ作品。

Leak

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STAR DRIVER コラボ作品。

【Nコード】

N8734R

【作者名】

Leak

【あらすじ】

「漆黒と仮面」のレイ。

「壊れた旋律を奏でるモノは」のレンカ。

2つの物語、2人の登場人物の

夢のコラボレーション！！

2人のキャラクターが壊れてしまう可能性もありますが
暖かい目で見ていただけるとなによりです！

この作品は

「STAR DRIVER 漆黒と仮面」を書いているLeakと
「壊れた旋律を奏でるモノはSTAR DRIVER」を書い
ているlinkさんの
お互いのオリジナルキャラクターを交えて書いた、クロスオーバー
でございます。

LeakSIDEでのご注意をいたしますので
これを読まずに読まれて気分を害したなどの感想はご遠慮ください
ませ。

1つ目。「STAR DRIVER 漆黒と仮面」に出ているレ
イ。

そして「壊れた旋律を奏でるモノはSTAR DRIVER」
に出ているレンカ、

小説本文よりキャラクターが壊れているかもしれません。

2つ目。お互いにメッセージを送りあって初めてできる作品ですが、
現在、linkさんは長期にわたって更新を停止されています。

作品のコラボに関しては停止以前にお話しさせてもらっています。
くれぐれもご迷惑のなきようお願いします。

3つ目。これは作品の設定についてです。

＊レイとレンカは入学式時に会話をしていない設定、同じクラスの
設定です。

＊ワコ・スガタ両方と幼馴染です。

＊この物語を書くにあたって、自身の小説の第2章を参考にしてい
ます。

それでは。

楽しんでよんでくださいませ。

とある、五月の放課後のお話……。

「あ！レイ！教室に居た！」

「どうした？ワコ。いつになく元気だな」

「だって！！」

「……買い物か？」

呆れ顔で黄色の髪の少女―ワコ―を見つめる、藍色のポニーテールの少年―レイ―。

「さすが、レイ！当たり前！」

「……やっぱりか。この前も行っただろ」

そして、レイはワコに引き摺られるように教室を出ていくのだった。

「みんな、おまたせー」

ワコが校門に居た三人の少年少女に声をかける。

「あー！ワコー！おそかったねー！あれ？隣の男の子はー？」

限りなく白に近い紫色の髪を持つ少女が笑顔でワコに話しかける。

「……？（この子、だ、誰だっけ……？）」

レイの頭上には疑問符が多く浮かんでいる。

「レンカー？レイは同じクラスでしょ？」

「え！そうだったか？！」

レイは目の前の少女―レンカー―と同じクラスであることを知らずクラスメイトのことを知らないものだな、と一人驚いた。が、声に出ていた。

「……スガタ、この人、怖い……」

レンカと呼ばれた少女が、青色の髪少年――スガタ――の制服の裾を掴んでいる。レイを何やら怖いものを見る目で見ていた。

「え？え？……俺、悪者なんですか？話してないんですけど……？」
そう言葉を発した途端、レンカの目には涙が。

「あーあ。レイが女の子泣かせちゃった」

赤い髪の少年―タクト―がレイを茶化す。

「ど、どうしよう……。えっと……」

「―（レイって焦ったらこんな顔するんだ）―」

幼馴染のワコでも知らないレイの焦り顔に驚きを隠せず、タクトとワコは目を丸くした。

「えっと、とりあえずだ。君の名前を教えて？」

「……」

目いっぱい涙を溜めてレイを見上げるレンカ。

「俺の名前は、ミョウオウ　レイ。レイだよ」

「レ……イ……？」

「そう、それが俺の名前な」

いつの間にかスガタの制服を掴む手が緩み、レイを真っ直ぐ見つめていたレンカ。次の瞬間。

「レイ……！」

「うおあっ……！」

レイに飛びついていていた。涙も消えていた。

「お、よかったじゃないか、レイ。タクトと同じように気に入ってもらえたみたいだよ」

「そっか、なら良かったさ。レンカちゃんだけ？よろしくな？」

「に……！」

「おう。最高の笑顔ありがとな」

そんな二人から少し離れた場所で、ワコとタクトがヒソヒソと、
「見た？レイがあんな笑顔なの！」

「僕もレイと会ってまだ少しだけど、あんな笑顔見せるんだね!」

「何年も友達やってるけど、あの笑顔はレアモノだよ!」

「明日は間違いなく、槍が降るね!」

二人の言い方だと、レイは普段から表情を表に出さない少年のようだ。しかし、事実、前髪も長く表情がわかりにくいのである。

「ワコ! タクト!」

レイが二人を呼ぶ。振り返ると何やら黒い笑顔で二人を見ている。

「早くしないと、置いていくよ?」

「行くよ?」

スガタの言葉の後に、レンカも付け加える。

「あ、うん! 今行く!」

「待ってよ!」

慌てて三人を追う、さっきの会話がレイに聞こえていることは知らなかった、ワコとタクトであった。

「しかし、レイ。大変なことをしたね？」

「ス、スガタ……？それは一体どういうことかな？？」

そういうレイの顔はスガタの一言で若干引きつっていた。女の子二人、レンカとワコが手をつないで前を歩いている。

「レイは知らないだろうけれど、レンカって男子に人気者なんだ。入学式の時、男子に囲まれてパニック起こしてたけどね」

「ああ、その時、多分俺見てない」

「うん、丁度僕らから離れた時だったし」

「つて、ちょっと待て。ということほだ。俺、レンカちゃんを校門で泣かせちゃった、イコールいろんな男子に見られてた、イコールもしかしくなくても俺、今すぐ危機に見舞われてないか？」

「やっとわかった？レイ、鈍くなったんじゃない？」

「スガタ……お前、それ笑顔で言うことじゃないよな。それにタクトも助けてくれたりとかしないのかよ」

「え？！……い、いやあ……」

いきなり話を振られて焦るタクト。無理はない。こうされるとタクトは何も返せない上に、レイの視線が怖くてすくんでしまう。

「ああ、タクトならレイがあまりにも笑顔でレンカと話すから驚いてたんだよ？」

「ス、スガタ！？なんでわかったの！？」

ワコとヒソヒソ話をしていたが、スガタには聞かれていない話だ。スガタはニコニコと笑顔で何も語らなかった。

「だろうな……タクト、後で覚えていろよ……？」

「レイーっ！タクちゃんーっ！はやくーっ！！」

レンカが彼らの目線の先にはワコとレンカがこっちを見て、レンカが叫んでいる。

「タクちゃん？なんでそう呼ばれてんだよ？」

レイは吹き出しかけながらタクトに詰め寄る。

「それなら、レンカがつけたあだ名だよ、レイ？」

スガタが相変わらず笑顔で答える。

「しかし、スガタ。お前だけ呼ばれなかったな」

「……」

「ごめん、悪気はなかったよ」

レイは顔をひきつらせながら謝り、レンカ達の方へ向かった。

「二人ともどうした？」

「レイ！あれあれ！」

「ケーキバイキングなのね！！」

いろんな店が立ち並ぶショッピングモールの中のとある店の前で女の子二人の目が輝いている。目を輝かせ行きたいと訴えている。

「おお……、いいな、あれ」

「レイは甘いもの嫌い？」

レンカが小首を傾げながら上目使いでレイに聞く。

「ん？いや、好きだよ。自分で作って食べるくらい」

「レイ、料理できるの？」

「ああ、頑張ればなんでもできると思う……今度作ってこようか？」
幼馴染のワコでも知らなかったらしく

「レンカにだけ、ずるいよーレイー。あたしにもちょうだい？」

「レイー、僕にもー」

タクトもいつの間にか話に食いついている。

「あー、ハイハイ。ここ店の中。店の中で騒がない。ちゃんと作ってくるから……あ、あれ……」

レイは何かを見つけたようで一人ふらりとある店に歩いて行った。

「ああ！レイ！」

ワコがレイを引き留めようとしたが無駄であった。

「ねえ、スガタ、レイっていつもああなの？」

タクトがスガタに問う。

「いつもさ、レイがああやって動くのは、いいものを見つけた時だ」

「レンカちゃん、こっち、こっちおいで……」

「どしたのー？レイー」

スツとレンカの頭にあるものを付ける。

「やっぱりレンカちゃんは黒かなー。ワコ、どう思う……?」

「……んに??」

レンカの頭上には疑問符が浮かんでいる。

「ワコ?そんなにレンカちゃんとお揃いがいいのか?」

「え?レンカとお揃い? いやあ、そんな……」

うれしいうで顔を赤くして喜んでいる。

「レイは、なにもしないのー？」

無邪気な笑顔でレンカがレイに話しかける。

「俺は……これでいいよ、切るの面倒だし」

藍色の髪をポニーテールにしているが、それでも、レイの髪は肩より下まで達していた。

「レンカ、レイは髪切るの嫌いなんだって」

「ああ、スガタのせいだな」

「じゃあ、アメヤが切ってあげるよ」

「レンカが……？」

そういつてレンカを見つめると、彼女は笑顔だった。

「だから、おそろい、しよ？」

レイ自身のトラウマとレンカの笑顔で揺れる中

「レンカ」

「どしたの？スガター？」

「レイの髪がそこまで長くなったのは相当時間かかったんだ。何か別のものにしてやれないか？」

髪を切りたくないレイのために、トラウマを植え付けた張本人が笑顔でそう言った。

「別のー？えーっと……ワコー？どうしよー？」

「とか言ってー、もう決めてるんでしょ？」

「う？わかった？……えっと、レイにはこれ！」

「レンカちゃん、それ、ネックレス？」

「そうだよ？でも、タクちゃんは口出ししちやメッ！」

「ぷっ……」

「ははっ」

今までなかなか会話に入れなかったタクトが会話には言った途端

レンカは怒った。と同時にレイとスガタが笑った。

「タクト、なに怒らせてるのさ」

「レイ。それ笑いながら言わないでよ……」

「いいじゃないか、別に。なあ？ スガタ？」

レイはスガタに視線を送る。スガタは肯定の視線を返した。

「んじゃ、買ってくるか。レンカちゃん、それ貸してー。ほら、ワ
コも、それ貸しなー」

いつのまにかレンカと色違いのカチューシャを付けていたワコは
身体をびくつと跳ねさせ、レイにそれを渡した。

「……レジに行くだけなのに、なんでお前らも一緒なんだよ。」

「別にいいじゃないか」

「さっき俺が使った言葉じゃないか、タクちゃん？」

レイが黒い笑顔で放った言葉に、タクトは怯えるのであった。

「あ、あの、二千円です」

「あ、どうも。ありがとう」

女性店員に笑顔で話しかけるレイ。彼女が惚れかけたようだが、レイにはわからない。

女の子二人のところに戻り、ラッピングされた袋を差し出す。

「えっと、これがワコなので、これがレンカちゃんのな」

「ありがとう！レイ大好きっ！」

「アメヤもレイ大好きっ！」

「うぐっ……抱きつく……苦しい……」

最後の苦し紛れの一言は二人の耳には届いていなかった。

街中から少し離れた、公園に四人は移動した。

「ワコもレンカちゃんもいきなり抱きつかないでくれよ、苦しい」

「「苦しい？」」

「……なんでもないよ」

女の子二人純粹無垢な笑顔に、レイは押し込められた。

「（スガタ、レイってこんなに押し込められる子だっけ……？）」

「（ハハハ、そういうことはないと思うけど……？）」

「レイッ！レイッ！おぶってー」

「レ、レンカちゃん？！うおわっ？！」

答えも聞かずに、レイの背中に縋るレンカ。

「にへへー。背中に縋るの好きー」

「だ、だからって、レンカちゃん……！」

「（また、レイが焦ってる……！！）」

レイとレンカの様子を見て、楽しんでいる様子のワコとタクト。

「あれ……？レンカちゃん？」

「レイ、レンカならぐっすりと寝てるよ？」

スガタがレンカの頭を撫でながら言う。

「おう、ホントだ……って、早いな、おい」

レンカを起こさないようにと自然に口数が減る四人。そんな時にタクトが口を開く。

「レイってさ、レンカちゃんには優しいよね」

「あー……なんでだろう……妹いないからかな……？」

「そっか、レイも一人っ子だったもんね」

「だから、レンカちゃんみたいな妹がほしかったなって思うんだよ」

「レイー？あたしは？」

「ん？ワコ？ワコはレンカちゃんとはまた違ったタイプの妹？」

「そっかあ……」

再び、四人は静まる。

「ぐえっ……」

「「「レイ？」」」

三人はレイの突然の奇声に疑問を感じた。

「スガタ……レンカちゃん、起きてない？」

「寝ているけど？」

「レンカちゃん……無意識に抱きつくなよ……」

タクトがふと顔を上げ、少し慌てながら

「忘れてた！寮に門限あったんだっ！」

「そうだったね！！あ……レンカどうしよう……レンカ、レンカ」

イツツアピーンチッ！と叫ぶ横で、相変わらずレイの背中ですやすやと眠っているレンカ。ワコが呼びかけるも起きないレンカを見てレイが大きい溜息をつき、レンカを背負い立った。

「……
レイ?
」

「ワコ、レンカの家の住所知ってるか」

「え？ うん、レンカから来ちゃダメって言われてるから行ったことないんだけど。案内しようか？」

「いや、いいさ。レンカちゃんが来ちゃダメって言うんだからそれなりの理由があるんだろうし。それに俺、方向音痴とかじゃないし。」

最後の一言でワコは落ち込んだが、レイにレンカの家の住所をメモ用紙に書いて渡すとレイは頷き、

「ああ、この辺か。わからないこともないな。うん、ありがとな。」

ワコ。とりあえず、明日、俺の笑顔で驚いてたのか聞かせろよ」

「ど、どういたしまして！ 笑顔って……ああっ！ レイとレンカ見ると、羨ましい兄妹だなんて思ったただけだよ？」

お互い笑顔だった。ワコがレイの笑顔にドキッとしていたが。

「なんだ、そんな理由か。じゃあ、スガタ、タクト。俺はレンカちゃん送っていくから、ワコを頼む。」

「うん！」

「わかった」

そういつて、五人は別れたのだった。

翌日。学校にて行われた会話。

「俺の笑顔が見たかったのならそう言えよな……？ タクト？ それと俺が笑ったくらいで、槍なんか降らないからな……？」

「ス、スイマセンでしたっ！」

「ねーねー、ワコ？ タクちゃん、なんで怒られてるんだろうね？」
「……さあ？」

Fin

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8734r/>

STARDRIVER コラボ作品。

2011年10月7日18時04分発行